

目次

被爆国の意地

桐野夏生

7

本書出版の経緯について

金平茂紀

10

一 復興暴力——浜通りの研究開発と「経済安全保障」

吉田千亜

12

二 夜の闇に沈むものは何か

桐野夏生

40

三 原子力政策の合理性を問う

鈴木達治郎

52

四 忘却に抗って書く——「負の記憶」を伝えるために—— 朽木 祥 74

五 特別収録 日本ペンクラブシンポジウム

「あれから13年、原発問題のいまを問う！」

チヨルノービリ紀行（講演録）—— 浅田次郎 89

チヨルノービリ視察団の報告書—— 野上 暁 96

六 シリウスのように—— 橋爪 文 107

七 原発と武力攻撃—— 青木美希 125

八 今日に残りの日々の、最初の日—— 落合恵子 153

九 四八二年間のノラ暮らしに向けて

吉岡 忍

172

十 隠蔽とねつ造の歴史

——核被害とメディアをめぐる事実の断片を積み上げる試み

——金平茂紀

208

十一 忘却の果てに

——ドリアン助川

236

被爆国の意地

私の世代は、「核」というより「放射能」という言葉に恐怖心を抱いて育ってきた。広島、長崎に投下された原子爆弾は、瞬時に数十万人の命を奪った。生き残った者も重度の火傷を負い、後遺症に苦しめられて謂われなき偏見に晒された。しかも、広島に投下されたのはウラン型「リトルボーイ」、長崎はプルトニウム型「ファットマン」だ。明らかに、犯罪的な人体実験だった。さらに、ビキニ環礁におけるアメリカの水爆実験は、第五福竜丸の被曝をもたらし、最近詳らかになったのは、広島、長崎、福竜丸に次ぐ第四の被曝としての、「拓洋」「さつま」事件だ。一九五八年、海上保安庁の測量船「拓洋」と巡視船「さつま」は、南太平洋でアメリカの水爆実験により被曝したのだった。

当時、雨には放射能が含まれていると言われたし、マグロには放射性物質が残留しているから気を付ける、など様々な言説が飛び交って人々は本気で怯えたものである。しかし、その恐怖を「放射能アレルギー」や「無根拠」などと囃し立てて嗤ってはいけない。そこには当事者でなければわからない怒りや恐怖、遣り切れない思いと繋がるものがあつた。私たちは常に当事者の気持ちを推し量り、その苦しみを共有しなければならぬと思つてきた。それが、世界

で唯一の被爆国である日本の意地だった。

そして二〇一一年、唯一の被爆国である日本に、またしても核の恐怖をもたらしたのが、東日本大震災における東京電力福島第一原発事故だった。ある日突然、住み慣れた土地や住まいから追われた者の辛苦はいかばかりか。なのに、事故後、原発の存在に不安を訴える者への冷笑やデマゴグは目を覆うばかりだった。しかし、一度起こした原発事故は取り返しがつかないことを思い知らされたのが、この事故の後処理の長さではなかったか。

それなのに、今また日本は原発回帰という道を進もうとしている。繁栄、発展という耳触りのよい言葉をもたらす平和利用だけでなく、現在、向かおうとしているのは、明らかに違う道でもある。それが核開発という名の軍事目的を含んでいることは、国際情勢を見る上でも、そして昨今の日本の排外的傾向から見ても明らかであろう。二〇二五年一〇月、トランプ大統領が近く核実験を行うと、SNSに投稿した。真偽のほどはわからないにしても、原発回帰という道に進もうとする日本に、何らかの影響を及ぼすことは確かだ。我々は今まさに、世界が壊れようとしている淵かちに立っているのではないだろうか。

日本ペンクラブは、言葉に関わる仕事をする人たちの集まりである。言葉は大事なコミュニケーションツールだ。原発回帰という流れに対して、言葉で議論を尽くしたいと考えている。本書の出版を快諾してくれた集英社新書編集部に心から感謝を申し上げるとともに、本書が少しでも、新たな議論の契機になることを願っている。言葉が何らかの制約を受ける前に、一刻も早く。

二〇二六年一月五日

日本ペンクラブ会長

桐野夏生

本書出版の経緯について

広島・長崎に原爆が投下されて八〇年という節目を迎えた二〇二五年、日本は、あの東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故を忘れ去ったかのように、原子力発電を最大限に活用するという方向に、エネルギー政策を大転換した。英語では核兵器 (nuclear weapon) も原子力発電所 (nuclear power plant) も同じ核 = nuclear が頭につくのだが、日本語では原子力と核とは別物のような扱いだ。しかし、根っこは同じ核分裂だ。軍事利用と平和利用は表と裏の関係、もつと直截ちやくさいに言えば、一体の関係にある。

一方で、核兵器を戦争において使われた国である日本においては、核廃絶を口にする政治家が幾多といっても、核抑止力の必要性については認めるという二律背反を生きている現実がある。当の被爆国である日本が、核兵器禁止条約に対して批准どころか、締結国会議へのオブザーバー参加すらしないという引き裂かれた状況の中に私たちはいる。

同じ年の二〇二五年、日本ペンクラブは創立九〇周年を迎えた。言葉を使う表現に携わる人々の親睦団体は、時代に応じてさまざまな顔をもってきた。文頭に記した原子力に対する姿勢においても、おそらく会員の中でさまざまな議論がこれまで交わされてきたのであろう。福

島の過酷事故以降、ペンクラブは、この問題に対して、現地取材や数々のシンポジウム、声明発表などを行ってきた。有志が Cholnoy (チェルノイリ) 現地視察に行ったこともある。

そうした中で会員の中から、二〇一二年三月にペンクラブ編で出版した『いまこそ私は原発に反対します。』のような著作を出版して世に問うことが適当ではないかとのアイディアが提案された。諸般の事情から全く同じ体裁の本を出版するのは困難であることが徐々にわかってきたが、集英社新書のご理解とご厚意から、本書『原発回帰を考える』の出版に至ることができた。心より感謝申し上げます。二〇二六年はあの福島の事故から一五年にあたる。こころよく執筆にご参加いただいた方々に感謝申し上げますとともに、これを機会に同趣旨の出版、発表の場がますます拡がっていくことを願ってやまない。

二〇二六年一月五日

日本ペンクラブ言論表現委員会

金平茂紀